

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	熊谷 瑞恵
論文題目	中国新疆ウイグル族の食べかたと住まいかたに関する人類学的研究 －女性のつきあいの場となる住居をめぐって－		
(論文内容の要旨)			
本学位申請論文は、中国新疆のウルムチとカシュガルにおける調査をもとに、ウイグル族の食べ物と空間をめぐるふるまいから、かれらの住居という場がもつ意味を描き出すことを目的とするものである。 本論文は全8章からなる。第1章では、食事文化、住居に関する先行研究のレビューをおこない、本論文の問題意識を明示している。第2章では調査地域について述べ、第3章では、住居の内装、料理、家族構成のありかたについて説明している。第4章から第7章では、住居における食べ物、空間をめぐるふるまいの分析とその結果について述べている。第8章では、結論としてふるまいをめぐってみいだされる住居の意味を総括している。 第1章では、まず本論文が注目する課題として、①食事をともしする単位が“家族”であるという視点、②居住者と訪問者を分ける空間の秩序、というこれまでの人類学の住居研究で確認されてきた2点を指摘する。特に後者の点は、これまでのイスラーム文化圏の住居研究においては、男女による空間の区別という点に関心が当てられ、ほとんど分析がおこなわれてきていなかったことである。 第2章では、ウイグル族と、ウルムチとカシュガルという2つの調査地域、さらに、それぞれの地域において調査対象とした各3軒ずつの家庭の概要が述べられる。 第3章では、食べ物や建築物としての住居の特徴、そして居住者というまとまりを構成する家族関係の特徴について述べる。具体的には調理方法、食卓への提供方法、ことわざと慣用表現を取りあげながら、ナンというムギ食品が、日常の食卓において欠かせないものとされていることを指摘する。住居については、家具の置かれかた、内装について述べ、住居内部が部屋同士の区別の少ない空間として構成されていることを指摘する。さらに、名づけにおける父称、婚姻形態、親族カテゴリーの分析により、かれらが居住者という人々のまとまりとして両親と血縁のキョウダイを重視し、親族については出自にもとづく系統性よりもむしろエゴを中心とするキンドレッド的血縁を重視していることを明らかにする。 第4章では、日常の食事の場のなりたちについて、とくに1日という時間を単位に、居住者と食事とのかかわりという点から分析する。そこでは、食べる前に調理を必要としない食べ物であるナンが食事の中心にあることにより、家庭では、いつでも食べることのできる食事の場が形成されることを明らかにするとともに、そうした食事の場が、“家族”ではなく“その場を共有した”という人間関係のまとまりを構成していることを指摘する。			

第5章では、訪問者の迎え入れられかたについて分析し、住居における食事が“見た人”が食べるものとして準備、提供されていることを明らかにする。また、そうした訪問者と居住者との関係が、宴席という場では、訪問者が一方的にもてなしをうけるというかたちで構成されていることを明らかにする。

第6章では、部屋が“居合わせた”者同士ですごされるという場になっていることを、空間の使われかたに関する定量的分析をもとに明らかにする。そして、部屋においては訪問者が奥側の上位の座位を占め、男女の寝室が区別されるが、夫婦は同室であることが明確に確認される。

第7章では、訪問者層について、17～34日間の定量的観察データにもとづいて分析する。その結果、まず、訪問者層には妻方の女性への偏りが認められることや、夫方の訪問者にも女性の訪問が多くみられること、そうした訪問はその家の妻が応対することを明らかにし、住居が妻同士、女性同士のつきあいの場となっていることを指摘する。さらに、そうした男女の区別が、結婚式などの行事では、男女の時間的な区別によって調整され、さらに女性の方が丁寧にもてなされていることから、住居が女性を主体とするつきあいの空間となっていることを明らかにする。

第8章は、本論文の結論にあたるものであり、以上の分析結果から総合的に考察し、以下の点を指摘する。第1は、ウイグル族の食事と空間が、定まったメンバーの利用を想定した様式をそなえていないことである。第2は、そうした場が“居合わせた人”とのあいだで共有されるものとして機能し、その結果住居が、行き交う人々を暫定的につなぎとめるという人間関係を構成する場としてみいだされることである。第3は、住居内が女性の社会空間として機能していることである。最後に、ウイグル族の住居が、性の区分を基準とした女性の社会空間であるとともに、夫婦の空間としても機能していることを解明し、この事実が、ウイグル族の住居が公的、私的という軸とは別に、男性、女性、夫婦という性の関係を差異化の原理とする住まい方にもとづくことを指摘する。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、中国新疆のウイグル族を対象として延べ23ヶ月間におよぶ長期間のフィールド調査を実施し、ウイグル語、漢語を駆使しておこない、人々の住居内における食事のとりかたや、住まいかたの微細な参与観察をもとに、彼らにとって住居という場のもつ意味を描き出したものである。ウイグル族の住居内での活動を実証的に明らかにした研究はこれまでにほとんどなく、本論文は、実地調査による一次資料をもとに、ウイグル族の食、住の特徴を明らかにした点で、ウイグル研究に大きく貢献するものである。さらに、本論文において評価されるべき点は以下のとおりである。

第1は、方法論上の独創性である。まず、ウイグル族の食文化におけるナンの食としての位置づけ、「食事」とは何かをいう問題を、彼らの間での食事をめぐる会話や食事行為を表す動詞表現の言語学的分析、彼らの日常生活における食べかたの定量的分析をもとに実証的な検討を行ったことである。また、ウイグル族の住居を対象に、住まい方、とくに女性にとっての住居のもつ意味について、住居内の部屋の名称、部屋利用の定量的観察、住居内への訪問者に関する定量的観察データをもとに検討した点である。

第2は、このような方法論を採ることにより、ウイグル族の食についての新しい知見を提示した点である。まず、彼らのナンの食べかたは、石毛直道が食卓研究で用いた類型論を適用すると、「放置型」と呼ぶことができ、ナンは食卓の上に常時放置され、つまみ食いの食品となっており、食事を常にとともに囲むという共有を目的とする食卓の要となる食品であることを明らかにした。また、ウイグル族は、ナンを食べて茶を飲むことを「茶を飲む」とし、「食事（タマック）をたべる」とはみなさないという食事観をもち、共有される「茶を飲む」行為をとおして、彼らの食卓は常に食べることに對し開かれていることを明らかにした。さらに、ウイグル族の開かれた日常的な食卓は、常に居合わせる人々全員が参加することによって成り立つものであり、彼らは、食卓が常に訪問者の突然の参入を想定しながら展開するものと考えていることを明らかにした。たとえば、食事を見た、聞いたという関係性そのものも、食事の共有の発生とみなされて、一定の取り分が届けられるという慣習の存在が明らかにされ、日常的食事が二つの家を繋ぐという社会的機能を常にもつことが示された。

第3に、高い壁で外部から遮断されたウイグル族の住居は、中庭と部屋という二つの空間区分をもつが、寝室、居間、客間というような部屋同士の機能的区別、住居空間内における固定された上位と下位という方向性、居住者と訪問者間での使用の区別など、固定した用途や個人別の利用を前提とする空間が設定されていないことが実証的に明らかにされた。しかも、このような空間構成をとる住居内の暮らしは、状況に応じて利用空間を移動できることと、住人が1カ所に集まりあって暮ら

すことという二つの原則に基づいている一方で、住居内の部屋には、客座という座位の観念があり、居住者が入り口側に、訪問者が奥にというように空間上の方向性が状況に応じて顕在化するという住まい方の特徴が示された。

評価される第4は、女性に対し閉鎖的といわれるウイグル族社会にあって、住居内が女性のつきあいの場となることを実証的に明らかにした点である。カシュガルの住居における訪問者の定量的観察データをもとに、女性の訪問者が多いこと、しかも女性の訪問は贈り物を携えての訪問・挨拶行為という意味をもつ場合が多いことが指摘された。女性は住居という“外”へ出かけ、“外”の住居にいる女性に訪問者としてもてなされるという、住居が女性のつきあいの場となる実態が明らかにされ、社会的ネットワークが女性をとおして維持されることが示唆された。

以上のように、本論文は、ウイグル族における食、住に関していくつもの新しい知見を示した点で評価できる。その一方で、女性が担う社会的ネットワークの性質や特徴、また、住居についてのカシュガルの事例がどれだけウイグル族の住まい方を代表できうるのか、さらに、本論で明らかにされたウイグル族の住まい方は、中央アジア地域の隣接諸民族のなかでどのような位置づけが可能かなどの点は、今後の課題として残された。しかし、食、住という日常性のなかに他者との連繋性が埋め込まれるという、ウイグル族における社会関係の一面を実証的に指摘できた点において、人類学的研究として高く評価できる。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成21年9月8日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降